

内閣府本府政策評価有識者懇談会（第3回） 議事要旨

日時：平成19年6月21日（木）17:00～18:30

場所：内閣府庁舎第3特別会議室

出席者（懇談会メンバー）

座長 山谷清志 同志社大学政策学部・大学院総合政策科学研究科教授
田辺国昭 東京大学大学院法学政治学研究科教授
田中弥生 独立行政法人大学評価・学位授与機構評価研究部准教授
南島和久 長崎県立大学経済学部地域政策学科講師

< 懇談会で出された主な意見 >

（平成18年度政策評価書（素案）について）

達成目標がアウトプット目標であるものが多いが、有権者の立場から見ると、アウトカム目標が知りたい。

最終的なアウトカムを簡単に測れないものについては、その前段階であるフォーラムへの参加やホームページの閲覧を代理指標とするのはやむを得ない。

例えば報告書の作成はその後の具体的な活動まで考えないとアウトカムの議論は難しい。ただし、報告書の作成レベルで政策評価をしなければならないのであれば報告書作成だけではアウトカムが記述できないと説明できていけばよいのではないか。

普及啓発型の施策についても、アウトカム評価を書こうとすると根拠のない話になりがちである。根拠に基づく範囲に抑制したほうがよい。

個々の評価書に書き込まれた有識者のコメントによって評価の質の保証をすることは重要である。有識者のコメントは読み応えがあり、勉強になった。ただ、政策に直接関わっている方によるコメントは避けるべきである。

内閣府ができる範囲の仕事についての評価が書かれており、他省の仕事は出てこない。仕方がないのだろうが、読み手からすると、この程度でいいのだろうかという感じがする。

内閣府だけではプログラムの全体像が見えないものについては、外部要因として整理するなどのやり方がある。

制度をきちんと言われた通りに運用しているかどうかという話は政策評価ではなく、行政監察である。

制度改正が行われた施策についての評価では、改正の目指す方向に沿って施策が行われているかを見れば役立つのではないか。

目標を設定する際には、絶対水準の目標と対前年度比の目標との比率を考えたほうがよい。

設定されている目標が絞られすぎて評価書に成果として出てこないのは、もったいない。

指標の値が急低下しているものについては、「達成できた」とすることには疑問があり、また、低下の理由の説明が必要である。

評価書の分量を減らすことはできないか。

(平成 19 年度実施計画について)

ロジック・モデル(「参考資料 政策の流れと測定指標及び目標値との関係」)は大変分かりやすい。2段階で政策のロジックと指標を表すのは効果的である。また、政策自体のPRの面でも意味がある。

普及啓発活動や報告書の作成のような政策について、どのようにアウトカムを整理するのは難しい問題である。

何を基準に目標値を設定するかということについて、ルールを設定しなくていいのだろうか。

目標を数字で出すことが政策の現場における行動を一定方向に誘導する効果について、精査しなければいけないのではないか。

ロジック・モデルを導入したなら、評価書の分量を減らしてもよい。

以上